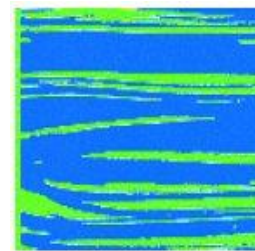


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2016年 春号 No.82 (2016年4月13日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第34回年次大会のご案内.....佐伯 大輔
連載：動物実験室探訪 (1) 常磐大学動物心理学実験棟の来し方行く末.....長谷川 福子
連載：私が行動分析学の道にはいった理由 (2) : 出会いと勘違いとトラブルの産物.....山岸 直基
連載：いま、こんな職場で働いています (2) : 行動分析に基づくリハビリテーションの実践の日々.....松井 剛
編集後記.....ニュースレター編集部

＜日本行動分析学会第34回年次大会のご案内＞

日本行動分析学会第34回年次大会準備委員会 委員長 佐伯 大輔

このたび日本行動分析学会第34回年次大会を、2016年9月9日(金)～11日(日)に大阪市立大学で開催させて頂くことになりました。大会では、ポスター形式による研究発表の他、心の哲学に関する特別講演、医療と行動分析に関する学会企画シンポジウム、防災に関する大会企画シンポジウム、公募企画シンポジウム、自主企画シンポジウムを予定しております。研究発表、公募企画シンポジウム、自主企画シンポジウムについては、ただ今、4月30日(土)を締切として、学会員の皆様からの申請を受け付けておりますので、ふるってご参加ください。

発表される方も大会参加のみの方も、大会・懇親会の予約参加の申込締切は4月30日(土)となっております。

ますので、よろしくお願ひします。

大会に関する更新情報は、随時、大会ホームページ (<https://sites.google.com/site/jabaosaka2016/>)にてお知らせしますので、ご確認をお願いいたします。

大会に関するお問い合わせは、下記の電子メールアドレスまでお願いします。

日本行動分析学会第34回大会準備委員会
e-mail: jabaosaka2016@gmail.com

皆様のご参加を心よりお待ちしております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

<連載：動物実験室探訪（1）>

常磐大学動物心理学実験棟の来し方行く末

長谷川 福子
常磐大学

今回はニューズレターの間をお借りして、常磐大学の動物心理学実験棟についてご紹介させていただきます。この機会を与えて下さったニューズレター編集委員の方々に感謝申し上げます。

日本国内において心理学分野の動物実験施設の数は少ないのではないのでしょうか。そのように数少ない動物実験施設の中でも、常磐大学の動物実験棟（写真1）の研究環境は非常に恵まれていると私は思います。そこで、常磐大学の動物心理学実験棟（以下、愛称である「動物棟」とする）の来し方行く末について、簡単ではありますが、皆様にご紹介したいと思います（注：森山哲美先生からお話を伺いました）。

動物棟が建てられたのは1983年で、常磐大学が開学して2年が経過した時でした。開学して間もないときに動物棟が建てられたことから、常磐大学が心理学、特に実験心理学の研究や教育をいかに重用視していたのかが伺えます。動物棟は、現教授の森山哲美（当時、専任講師）、伊田政司（当時、専任講師）、そして中村則夫（当時、助教授）の3先生によって設計されました。

動物棟は慶應義塾大学文学部心理学研究室の動物実験棟を参考にして、建てられたそうです。ただし、慶應義塾大学の動物棟と異なる点は、ヒヨコを用いた刻印づけの研究を行うのに必要な環境が整備されたことです。それによって、実験的行動分析学とエソロジー（行動生物学）を融合した研究が可能となりました。現在の動物棟の間取りの模式図を図1に示します。

このような素晴らしい環境で、今まで多くの興味深い研究が行われてきました。例えば、早成性鳥類のヒナの刻印づけにおける行動随伴性の機能の研究、系統飼育された情動性の異なる近交系ラットの行動傾向を調べる研究、ニワトリのヒナの胚期聴覚経験が孵化後

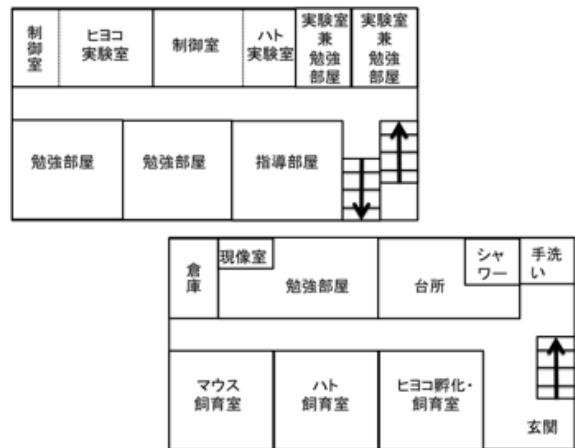


図1 常磐大学動物心理学実験棟間取り模式図

の聴覚刺激に対する好みに及ぼす効果を調べた研究、ハムスターにおける労働区分：社会的飼育条件の違いの効果調べた研究、遅延見本合わせ課題における遅延期間中のハトの仲介行動を検証した研究、ハトにおける resurgence の実験的検討、ウサギの色光弁別学習を調べた研究、ハトを使ったオペラント遅延強化における変化抵抗を測度とした信号機能を検討した研究、ハトやヒヨコにおけるスケジュール誘導性の攻撃行動を調べた研究などが行われてきました。

上に示した研究テーマをご覧いても分かるように、今まで実験に使用した種は、バラエティに富んでいます。例えば、ハト、アヒル、カモ、ニワトリ、ハムスター、マウス、ラット（近交系）、インコ、金魚、ウサギ、イヌ、（岡ノ谷一夫先生から頂いた）ジュウシマツ、銀バトが使用されてきました。現在は、ハトとニワトリヒナ（写真2）、インコのみを飼育しており、寂しい状況です。しかし、時々飼育した覚えのないゴキブリとナメクジが棟内を徘徊していますので、やはりバラエティ豊かであると言えます。



写真1: 動物実験棟の玄関



写真2: 被験体であるニワトリヒナ(左上)とハト



写真6: ハト用オペラント実験箱(左)とヒナ用オペラント実験箱(右)

行動実験には実験装置が必要不可欠です。動物棟でもこれまで多くの装置が使われてきました。まず紹介したいのは、Apple II-e マイクロコンピュータです。このマイコンは常磐大学開設以来、現在も現役で働いています(写真3)。何と私たち院生の年齢よりも長い期間に渡って頑張ってくれているのです！中には森山先生が自腹を切って購入したAppleもあります。また、現在は使用していませんがMSX マイクロコンピュータもコントローラとして使用していました(関西学院大学の中島定彦先生に1台贈呈したとのことです)。さらに、電気ショック発生装置が付いたラット用シャトルボックス、円形走路、T字走路、直線走路(写真4)、回転輪(写真5)、ハトやヒナのオペラント実験箱(写真6)、累積記録器(写真7)やイベントレコーダー(写真8)など多くの実験装置があります。それらの中には自作のものもあれば、Gerbrands 社や大久保測工研究所、東理システム研究所などによって製造されたものもあります。今後も、研究や実験の目的に合わせて装置を開発して行く予定です。最近では、Arduino とノート PC を使用して実験制御を行う準備をしています。また、これまでとは異なる種(例えば、ミシシッピアカミミガメ)で実験も行いたいので、そのための実験環境も整備する予定です。

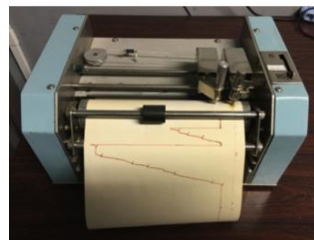


写真7: 累積記録器



写真8: イベントレコーダー

動物棟では研究だけが行われてきたわけではありません。動物棟では、非常に面白いイベントも毎年行われています。8月初旬に行われる水戸の大祭(黄門祭り)の花火大会と合わせて行われる動物棟大掃除と常磐大学動物慰霊祭、そして夏祭りです。大掃除では、全室に居住しているゴキブリたちを退治します。慰霊祭では、実験で亡くなった動物たちを慰霊するために森山先生が般若心経を読経します。その後、屋上でバーベキューとビールやお酒の時間となり、これが夏祭りとなります。夏祭りには、色々な先生や学生たちが参加してくれます。お祭り好きなあなた！今年の夏祭りに是非ご来訪ください。他にも、大学の学祭で、ハトのボーリングやハムスターレース、刻印づけによる追従反応のデモンストレーションなどの出し物を行っています。

以上のように、厳しくも楽しい状況で研究を行っており、今後も昼夜に関係なく、学部生、院生、森山先生が動物棟でいそいそと研究に励んでいくつもりです(写真9)。しかし、残念なことは、動物実験を行う学生の数が年々減少していることと、声を大にして言えませんが、森山先生がお年を召されてきたことです。森山先生のご退職後、どのように私たちが動物棟での研究を発展させていくか、その責任は非常に重大である



写真3: 現役のApple II-e
マイクロコンピュータ



←写真4: ヒナ用回転輪



↓写真5: 直線走路

と考えています。今後、行動分析学における動物実験の意味を学生達に学んでもらい、動物の行動研究を行ってもらうための工夫をしていくつもりです。読者の皆様からは、この問題に関して適切なアドバイスを頂

けると幸いです。

最後になりますが、動物棟を見学なさりたい方は長谷川 (hasehuku1224@gmail.com) までご連絡ください。

終

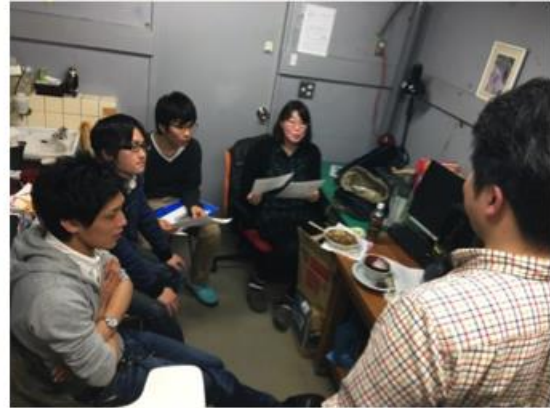


写真9: 日夜研究に勤しむ動物棟の仲間たち

<連載：私が行動分析学の道にはいった理由（2）>

出会いと勘違いとトラブルの産物

山岸 直基
流通経済大学

行動分析学という学問領域にかかわりを持つようになって早 20 数年、今日に至っているのは多くの方々との出会いの産物であり、またいくつかの勘違いやトラブルのおかげといえるかもしれません。

学部時代

私は当事、埼玉大学の教育学部にあった社会教育総合課程に入学しました。これは教員免許取得を目的としない課程でした。この課程にはカウンセリングのコースがあり、漠然と「人に関わることを学びたい」と思ったことが受験したきっかけでした。私は第 2 期生として入学したのですが、課程に配属されていた先生方も「これから新しいものを作るぞ」という熱意にあふれていたように記憶しています。そこには、梅津耕作先生と茨木俊夫先生という日本の行動療法を代表す

る先生方もいました。しかし、そのとき私はその偉大さにまだ気づいていませんでした。

私は学部時代には、この課程の実習先の 1 つである埼玉県障害者リハビリテーションセンター（現在の埼玉県総合リハビリテーションセンター）で、指導員のアルバイトを数年行っていました。またそれ以外にも、東京学芸大学の特殊教育研究施設に通い、清水直治先生の下で障害児療育のお手伝いをしたり、茨木先生の下でパニック障害の方の支援の手伝いをしたりしていました。しかし、このような臨床的な現場を経験させてもらっていたのですが、どうも他の学生よりも他者への関わり方が下手だと気づくようになりました。自分でやると、なんだか上手くいかないことが多いのです。

その一方で、行動療法やその背景にある考え方に興

味を持ち、同じ課程の先輩や仲間と一緒に行動主義的な心理学の勉強会をしたりしていました。そこでは、レイノルズの「オペラント心理学入門」、バーロー＆ハーセンの「一事例の実験デザイン」など、行動分析学の基礎的な教科書を読んだりしていました。また、渡邊芳之先生と佐藤達哉先生（当時の所属は都立大学）が埼玉大学で行った行動分析学の勉強会に参加させてもらったりもしました。そうするうちに徐々に応用や臨床よりも、もっと行動分析学の基礎的な研究に興味を持つようになりました。結局、学部4年間の一番大きな収穫は、自分が臨床に向いていないことと基礎研究に興味があることに気づいたことかもしれません。熱意のある先生方に囲まれながらも、色々と悩んだ結果として、臨床から基礎へという方向転換をしたのでした。

そして、卒論は何をやろうかと考えていたところ、迷信行動の研究に興味を持ち、茨木先生と梅津先生のご理解・ご協力により、埼玉大学に在籍しながら卒論では駒澤大学の小野浩一先生にご指導いただき、実験的な研究を行いました。その当時のことを思い起こすと、小野先生もよく私のような学生を指導していただいたと思います。というのも、すでに述べたように私はカウンセリングを中心に学んでいたため、いわゆる初等実験や心理学実験演習といった科目を履修する機会がありませんでした。そもそも実験の経験もなければ、実験レポートを書いたこともなかったのです。卒論の最初の草稿を小野先生のところに持って行ったときには、いろいろコメントをいただいた中で最初「君、面白いねえ、語尾が、です・ます調だよ」と笑顔でいわれたのを覚えています。当時、私が読んでいた佐藤方哉先生の論文が一般誌に寄稿していたもので「です・ます調」で書かれていました。これを真似したわけです。大急ぎで語尾を修正し、何とか無事に卒業論文も書き上げました。その卒業論文がどのように影響したのかはわかりませんが、そのようなご縁があり、駒澤大学の大学院に進学することになりました。

大学院時代

大学院に進学したのは良いのですが、心理学自体の素地がなかったため、大学院ではまず心理学実験の基

礎から学ぶ必要がありました。そこで、人間を対象としたスケジュールパフォーマンスの実験の基礎について、小野先生から課外の指導を受け、オペラントの基礎を少しずつ身につけていきました。初めは実験結果が思い通りにいかないと、実験参加者のせいにしていましたが、実験場面を工夫することで、異なる結果が出るのを経験し、少しずつ実験の意味を学んでゆきました。

それと並行して、修士論文のテーマを決める必要がありました。私は初め、行動の伝播という問題を扱いたいと考えていました。しかし、なかなか上手い実験を考えることができず、数ヶ月暗礁に乗り上げていました。それを見かねた小野先生が迷信行動に関する論文をいくつか紹介してくれました。私は今でもそうなのですが、文章を読むとき、その核となる部分をとらえるのが苦手で、むしろささいな細かなところに目が向く傾向があります。紹介された論文の中で引用されていた文献の1つが Page & Neuringer (1985) の *Variability is an Operant* という論文でした。この論文との出会いが私のその後の研究の方向性を決めることになりました。この論文では、行動変動性はオペラントであるという主張がいくつかの実験に基づいて展開されていました。そして Schwartz の一連の研究を土台としながら、批判的に検討を行っている部分がとてもおもしろく感じました。根拠を積み上げて議論を行うことがこんなにわくわくするのかと、一人で興奮していました。そんなわけで小野先生の意図とは別の方向に進み始めてしまったわけです。

梅津先生や茨木先生の偉大さに感謝したのは、大学院に入ってからです。学会に参加したときに、偉い先生方とお話する機会があると、出身校を聞かれたりするわけですが、「今は駒澤大学なのですが、その前は埼玉大学で・・・」と、梅津先生や茨木先生のお名前を出すとびっくりされることがたびたびありました。そんなことがあって、あの時もお二人から学んでおけば・・・と思ったものです。でもその願いがかなって、梅津先生が駒澤大学で非常勤講師として行動療法を教えることになり、もぐりで授業を受けさせてもらいました。埼玉大学の学生時代には聞くことのできなかった行動療法の実践についての話を聞くとても良

い機会でした。

大学院に入って2つ目の関門はプログラミングでした。学部時代PCすら持っていなかった私は、実験用のプログラムとしてN88BASICを勧められ、数冊のプログラミングの本を参考にしながらプログラムを作り始めました。初めて実験プログラムを作ったのが修士1年の冬だったと記憶していますが、知人に1万円で譲ってもらったノートPCで夜中まで、あるいは明け方まで黙々と作業していました。数行のプログラムを書いて実行すると、プログラムが少し動きます。プログラムがうまく動かないときに、間違いを発見して直すともた少し動きます。これを経験しながら徐々にプログラミングに「はまる」ことで、即時強化の実例を自ら経験することになりました。ただ、「反応の入力」にはとても苦労しました。初めはキーボードを反応入力に用におおうと考え、そのようにプログラムを作りました。しかしいざ実験をしてみると、実験参加者は思わず行動に出ることがあります。たとえば、キーボードのキーを押さばなしにすることで、そのキーを繰り返し押し続けているとPCに認識されてしまうことがありました。これに気づいたときは愕然としました。これまでの実験データが無意味なものになってしまった瞬間です。プログラミングは今でも得意ではありませんが、それでもなんとかできているのは、あのときの教育と経験のおかげだと思っています。

自分の実験とは別に、大学院生時代には、「ハトスタッフ」のメンバーになり、日々のハトの世話や動物実験のお手伝いをしていました。このときの経験は、10数年後の海外で動物実験を行う素地となりました。また、ハトスタッフをするなかで、小野研究室伝統の、教養科目の心理学の講義におけるハトのデモンストレーション（通称：ハトデモ）の出前やその準備をしたりしました。さらに、ハトデモでは実験箱をハトが時計回りに一周する行動を見せたりするのですが、そのシェイピングをさせてもらったことがとても印象に残っています。ちょうどハトデモ用のハトを世代交代させることになり、新しく選ばれたハトの行動を徐々にシェイピングするのは楽しい経験でした。実験箱を時計回りに一周するシェイピングを始めて数日後、ハトが三分の一周できるようになったところで、フィーダ

ーを操作していないのにフィーダーの方を振り返ってしまうという行動が出てきました。そのような行動はしてほしくないのですが、誤った行動を消去しようとすると他の行動も減ってしまいました。しかしこういった経験によって強化と行動変容の関係を直に学ぶことができました。もちろん最終的にはなんとか一周させることができるようになりました。

大学院時代には海外の研究者と出会う機会がありました。これは私にとってインパクトのある出来事の1つでした。特にDr. Iver H. Iversen、Dr. William Heward、そしてDr. Richard Malottとの出会いを鮮明に覚えています。Dr. Iversenは小野先生が駒澤大学に招待して講演をしてもらいました。当時彼は霊長類研究所でチンパンジーに文字を書かせる実験をしていました。その研究を紹介してもらいました。文字を書けるようになるまでのプロセスと、実験における試行錯誤の話がとても興味深かったです。Dr. Hewardは慶應義塾大学で大学院の授業を行うということで、駒澤から参加しました。Applied Behavior Analysisの初版をテキストにしていました。毎週1章分の講義があるので、分量としてはとてもハードな授業でしたが、毎週楽しみにしていたのを覚えています。Dr. MalottはWestern Michigan大学でboot camp（米海軍の新兵訓練）と呼ばれ恐れられている夏季集中講義を当時から担当していました。佐藤先生ご夫妻のご尽力で日本から少人数のグループで参加することになった最初の年の学生でした。そのキャンプもなんとか無事に乗り切った私は、今となって思えば根拠のない自信を持ち始めていたようです。でもこのキャンプを乗り切ったのは、事前トレーニングをいただいた島宗先生や、Dr. Malottのインストラクショナル・デザインに基づき、ハードではあるけれどスムーズな学習を引き出す指導のおかげなのでした。このような比較的濃い2年間を過ごし、研究者への道をめざす覚悟を決め、勘違いしたまま博士後期課程に進学することになりました。

博士後期課程に在籍した期間では、修士論文の作成過程で洗い出された問題点を解決しながら行動変動性の研究を続けていました。というよりも、うまくいかなかった部分を整理することでようやく研究のスター

ト地点に立つことができました。その一方で、研究の手を広げようと模索もしていました。当時流行っていた「マーフィの法則」に関する実験を行ったり、ランダム生成の研究を始めたりしていました。しかしこれらは長く続きませんでした。今後これらのテーマを復活させる可能性はゼロではないですが、その当時の模索はあまりうまく行きませんでした。そしてまた行動変動性に集中することになりました。

博士後期課程の最後の1年から数年間は、小野先生が日本行動分析学会の理事長になったので、その事務局員をしていました。当時は日本行動分析学会の理事長は、教え子の大学院生を事務局員（アルバイト）にして学会運営をすることを求められていました。そのような事情で学会の事務手伝いをしていました。その経験は、日本行動分析学会の著名な先生方と知り合いになる機会になりました。また、会員管理を通して、当時は会員の先生方のお名前を見るとどこの所属か一通りわかる状態になっていました。今となっては懐かしい良い思い出です。

現在

大学院を出てしばらくして現在所属している流通経済大学に専任講師としての採用が決まりました。着任当初は、学内業務に追われ、その後も大学の認証評価に関わったりして研究がおろそかになっていましたが、West Virginia 大学で1年間在外研究の機会に恵まれハトで行動変動性の実験を行ったりしました。そこでは Dr Kennon, A. Lattal にお世話になりました。さらに今は同僚にも恵まれ、『行動分析学研究』第29巻別冊で編集長を担当された井垣竹晴先生と同じ大学の教員として、静かに行動分析学の教育と研究をしています。最近はあまり意識していませんでしたが、研究を長く続けられる環境に留まっていられることを幸運に思っています。埼玉大学に入学して以降、さまざまな人たちに出会う機会に恵まれました。この出会いとともに、勘違いやトラブルの経験は、私を行動分析学、そして研究者の道へ導いた原動力でした。この今後も多くの人と出会い、勘違いしたりトラブルに出会ったりすることで、この幸運が続くのかなと考えています。

<連載：いま、こんな職場で働いています（2）>

行動分析に基づくりハビリテーションの実践の日々

松井 剛

医療法人社団千葉秀心会東船橋病院、行動リハビリテーション研究会

私は現在、脳神経外科を主とした東船橋病院のリハビリテーション科で、理学療法士として急性期から維持期までの患者に対するリハビリテーションに従事しています。脳卒中患者は多くの場合、今までできていた歩行などの基本的な動作、トイレや風呂などの日常生活活動をはじめとしたさまざまな動作・活動が困難となります。脳卒中患者に対するリハビリテーションでは、それらの動作・活動の再獲得を目指した練習が行なわれます。また、そのための基礎として、筋力増強運動、バランス練習なども行なわれます。従来から、病気になってリハビリテーションを目的に

入院、通院している患者は「指導した運動・練習をやってくれて当たり前」、「やってくれない患者は意欲がない患者であり適応外」というような思想が根底にあり、「やってくれないのだから効果が上がらないのは患者のせい」とされていた風潮があるように思います。私も学生時代はそうのように考えていましたが、そんな私の考えを根底から変えてくれたのが現在勤務している東船橋病院での臨床実習でした。

「失敗を繰り返すと学習性無力感を生じる」これには眼から鱗が落ちた気持ちでした。リハビリテーションは筋力

増強にしても、歩行練習にしても「一日にして成らず」であり、コツコツ数ヶ月の積み重ねでやっと効果が出ることも珍しくありません。これは逆に考えると、日々行なってもその日に得られる効果はほとんどないという事であり、いわば「失敗を繰り返している」ことと解釈できます。心理学の授業で聞き流していた行動分析学が、こんなにも私たちの仕事であるリハビリテーションに通じるものがあると痛感しました。そして、日本行動分析学会第30回年次大会委員長の山崎裕司先生のご指導のもと、今ではスタッフ全員が行動分析学に基づくリハビリテーションの確立を目指し、日々実践を積み重ねています。行動分析学に基づくリハビリテーションの展開に賛同する療法士は増えてきていますが、職場で少数派であると、褒めることすら否定され、実践を妨げられる環境も少なくないのが現状です。しかし当院は、おそらく全国一と言ってよいくらい環境が整っており、医師・看護師からの理解も得られ、他院では考えられない大胆な強化刺激の導入も挑戦してい

ます。今年度は、今まで積み重ねてきた実践をまとめ、従来の姿勢・動作練習結果と行動分析学に基づく介入結果を比較したデータを検討して、報告することに挑戦していきたいと考えています。

昨年からは、山崎裕司先生を会長とする行動リハビリテーション研究会で事務局長を務めさせていただいております。そして、職場での実践に加え、リハビリテーションにおける行動分析学の普及活動にも微力ながら力を注いでいます。私は、行動分析学はリハビリテーションの実践に有用であり、その普及が多くの患者と家族の笑顔を取り戻すことにつながると確信しています。行動分析学の世界において、リハビリテーションはまだ始まったばかりの未成熟の分野です。リハビリテーションに携わる職種以外で行動分析学を実践されている先生方のご意見、ご指導をいただきながら、リハビリテーションが行動分析学のひとつの実践分野として認知されるように、これからも励んでいきたいと思っております。

編集後記

今号の発行で、新体制となったニューズレター編集委員の担当が一巡しました。今回、編集を担当し、ニューズレターが学会員のみなさまに支えられていることを改めて実感いたしました。特に今号では、動物実験棟に関する記事から医療分野に関する記事まで様々な分野に携わる先生方大変興味深い記事を掲載できました。唐突な原稿依頼にも関わらず、快く引き受けくださった諸先生方には心より感謝申し上げます。

今号には「第34回大会年次大会のご案内」の記事を

掲載いたしました。ニューズレターでは今後も学会員のみなさまへのお知らせや案内も掲載していきますので、ご覧ください。

引き続き、みなさまからの記事のアイデアや企画などを募集しております。「こんな研究会しています」、「こんな論文を書きました」などありましたら、ぜひニューズレター編集委員までお知らせください。ご寄稿をお待ちしております。(KK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25
日本大学大学院総合社会情報研究科
日本行動分析学会ニューズレター編集部
真邊 一近
E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp